様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６７０
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５２４４０１４

研究課題名（和文）新しいカルチュラル・スタディーズの基礎理論構築―残滓としての英国批評を活用して

研究課題名（英文）Reconstructing the Basic Theory of Cultural Studies: Applying "Residual" British Criticism

研究代表者
川端　康雄（KAWABATA, YASUO）

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：８０２１４６８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　15,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、近年の批評理論・文化理論の展開をふまえ、エドマンド・バークからレイモンド・ウィリアムズまでの近現代英国批評を国際的に再検討することで、人文学研究、とりわけ文化に関わる研究に独自の貢献を行うことであった。その際、英国批評のなかで「残滓的」とみなされている批評家および著作に注目し、英国批評の伝統と歴史の中心に位置する「文化をめぐる思想」を系譜学的に考察しつつ、カルチュラル・スタディーズの基礎的方法論構築の作業を行った。その結果、英国の文化批評の系譜が、同国における産業化の経験とそれへの反応と不可分であることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）： Our study aimed to make a unique contribution to humanities, especially those studies relating to culture, by re-constructing the basic method of cultural studies. For that purpose, taking into account of the latest scholarship of critical and cultural theories, we re-examined modern British criticism from the eighteenth to twentieth centuries--those critics regarded as "residual"--from Edmund Burke to Raymond Williams. In doing so, we set them in the international context, investigating the idea of culture genealogically. Our research has confirmed that the genealogy of cultural criticism in Britain is inseparably related to the experiences of industrialization those critics had, as well as to their responses to it.

研究分野： 人文学

キーワード： カルチュラル・スタディーズ　文化唯物論　フレドリック・ジェイムソン　レイモンド・ウィリアムズ　ウェールズ文化史　ユートピア　エコクリティシズム　リアリズム

１．研究開始当初の背景

英米圏において、英文学者レイモンド・ウィリアムズ、リチャード・ホガート、歴史学者 E. P. トムスンらの 1950 年代の第一世代の仕事に端を発し、ステュアート・ホールら第二世代によって 1970 年代以降本格的に編成されたとされるカルチュラル・スタディーズとは、次のような特徴をもつ分野だと一般に解されている。１）文学的教養に精通した F. R. リーヴィス的「少数者文化」を厳しく批判し、マスメディアや映画などを含めた現代の「ポピュラーな文化」を研究する。２）西洋の伝統的な人文学の方法論から距離をとり、1960 年代以降の「科学的」な構造主義理論に依拠する。

これらの特徴が端的に示すように、カルチュラル・スタディーズは、「科学」の衣装を身にまとい、伝統的な視点をイデオロギー的なものとみなすことで、エリート主義的な文化と袂を分かとうとする分野であり、換言すれば、「普通」で「日常的」な文化を分析しようとする分野である。

上述したアプローチは、確かに解放的な作用を持つように見える。しかし彼らのアプローチには大きな難点がある。S. ホールは、先行世代が伝統的な文化分析の語彙に拘泥し、イデオロギー上問題があると批判する (“Politics and Letters” 1989)。ところが、F. マルハーンがその決定的な批判で示したように、カルチュラル・スタディーズの鍵語である「ポピュラー」という言葉こそ、「均質で凡庸、受動的」な民衆というポピュリズム的イメージを恣意的に形成してきたものだった(*Culture/Metaculture* 2000)。加えて、J. エスティや P. カリニーら新進のイングリッシュネス研究者に典型的に見られるように、カルチュラル・スタディーズの無意識的ナショナリズムの側面も問題化されている (*A Shrinking Island* 2004; *Cities of Affluence and Anger* 2006)

だがこの批判的潮流は、現代の文化研究が先行世代研究者のイデオロギー的誤謬を「部分的」に指摘することに専心する「無限の後退戦」に陥っていることの徴候でもある。本研究課題はこのような「袋小路」を打開すべく、次の二つの前提を採用する。１）エドマンド・バークからレイモンド・ウィリアムズに至る書き手がその思想を記述した〈文化〉とは、産業資本主義や自由放任思想への反発と介入の系譜が織りなす〈複雑な全体 whole complex〉であり、ナショナリズムやポピュリズムはもとより、少数文化もポピュラー・カルチャーもこの〈複雑な全体〉の一部である。２）現在の諸問題を考察するためにこそ、伝統や歴史を考察せねばならない。別言すると、本研究課題の企図は、今や残滓と化しつつある英国批評を〈複雑な全体〉として検討することで、イデオロギーと科学、文化と社会、現在と伝統・歴史といった、今日の人文学とりわけ文化研究の窮状を招来している様々な分断を、乗り越えることにある。

２．研究の目的

本研究の目的は、近年の批評理論・文化理論の展開をふまえ、エドマンド・バークからレイモンド・ウィリアムズまでの近現代イギリスの批評を国際的に再検討することで、人文学研究、とりわけ文化に関わる研究に独自の貢献を行うことにある。その特色は、以下の２点に大別される。

①カルチュラル・スタディーズの方法論（ディシプリン）の構築

カルチュラル・スタディーズが本来保持していたのは、現在の諸問題を考察するためにこそ、伝統や歴史を考察せねばならない、という独特な視点であった。この特殊な〈現在性 actuality〉を回復し、カルチュラル・スタディーズの基礎的方法論を堅固に構築する。

②英国批評における〈文化思想 ideas of culture〉に対する系譜学的アプローチ

①の目的を達成するために、英国批評の伝統と歴史の中心に位置する「文化をめぐる思想」の系譜を探る。バークからウィリアムズに至るこの伝統が洋の東西を問わず「現在の私たち」の生に制約と可能性の双方をもたらしている様相を系譜学的に考察する。その際力点が置かれるのは、英国の〈文化思想〉が、産業資本主義、自由放任（レッセ・フェール）思想、ナショナリズムといった近現代的問題群に介入ないしは反発する様相である。

３．研究の方法

本研究は、基盤研究 B（一般）「構造主義の残滓としての英国批評の国際的再検討」（2010～12 年度）で確立された、研究者の文献研究（国内外の図書館・アーカイヴにおける調査含む）を基礎とし、それを定期的な研究会、シンポジウムなどによって共同の検討に付すという手順をさらに改善しつつ行われた。また、応募者はこれまで「レイモンド・ウィリアムズ研究会」という形で定期的な研究会を行ってきたが、本課題は対象とする時代が広範囲なため該当する時代の専門家を招いての研究会を行った。研究水準の維持・向上のため、既に協力関係にある海外研究者を招いた国際シンポジウム開催、ウィリアムズ研究会の機関誌として『レイモンド・ウィリアムズ研究』を第 4 号（2014 年 3 月）から第 7 号（2017 年 3 月）まで刊行した。

４．研究成果

2013 年度は 11 月に本研究の交付決定があって、実質上 5 ヶ月に満たない短い研究期間ではあったが、最大の企画として 2014 年 3 月 16 日に国際シンポジウムを日本女子大学にて開催し、成功裏に終えることができた。特に 2 人の招聘者、ウェールズ史研究家のクリス・ウィリアムズ博士（カーディフ大学教授）、ウェールズ文化の観点から英文学を読み直しているアンドリュー・ウェッブ博士

（バンガー大学講師）の参加を得て、産業主義と文化というテーマで論議を深められたことは、今後本研究を進展させる上でたいへん有意義であった。

加えて、上記のほかに国内での研究会を 2 度開催し、共同研究を進めることができた。海外出張については、川端康雄（代表者）が 2014 年 3 月 22 日から 3 月 31 日まで、ロンドン（ヴィクトリア･アンド･アルバート博物館、ロンドン大学セネット・ハウス）およびスウォンジー大学図書館にてウィリアム・モリスおよびレイモンド・ウィリアムズに関する調査と資料収集をおこなった。また、遠藤不比人（分担者）は 2014 年 3 月 22 日から 3 月 25 日まで、ロンドンの精神分析協会図書館でブルームズベリー・グループによる精神分析受容、特にカリン・スティーヴン関連の一次資料を調査した。

2014 度は前年度の国際シンポジウムと資料調査の結果を受けて各自および集団的に研究内容を検討し、同時に専門家を招聘しての小規模な講演やセミナー、また個別の研究発表を適宜実施した。なお、エドワード・サイードなどポストコロニアル批評の研究動向を踏まえる必要があるとの認識から、2014 年度よりこの方面を専門とする西亮太を新たに研究分担者として加え、共同研究の幅を広げた。

専門家の招聘についてはモダニズム文学、批評理論について十分な実績を有する二人の研究者 Dr Ramon Del Castillo (Universidad Nacional de Educacion a Distancia)と Dr Dougal McNeill (Victoria University of Wellington)を招聘の上、2014 年 9 月に The Im/possibility of Realism and Utopia: Jameson, Williams, and Fiction と題する連続講演会とセミナーを大阪大学と成蹊大学で開催し、本課題に密接に関わる「リアリズム」と「ユートピア」の批評的可能性についてレイモンド・ウィリアムズとフレドリック・ジェイムソンの著作をとおして考察・検討する機会とした。また国内からは社会学、イギリス思想史の専門家を招聘して 2014 年 9 月と 2015 年 3 月に臨時レイモンド・ウィリアムズ研究会を開催した。

加えて、資料調査については、British Library ほか、海外図書館、アーカイヴで調査をおこなった。また課題遂行に必要とされた資料については、国内外図書館所蔵のものを含め、各自収集と分析を進めた。

文献研究（国内外の図書館・アーカイヴにおける調査、また著述家の伝記および作品世界に関連した実地調査を含む）を基礎とし、それを定期的な研究会、シンポジウムなどによって共同の検討に附すという手順をさらに改善しつつ研究を進めた。

2015 年度は、代表者の川端は 2015 年 4 月と 2016 年 3 月の二度にわたり、英国に出張し、研究発表および R. ウィリアムズと W. モリス関連の調査を行った。また本研究の代表者および分担者 4 名（山田、遠藤、河野、大貫）が翻訳に関わった R. ウィリアムズ『想像力の時制――文化研究２』を 2016 年 2 月に刊行した。分担研究者のうち、大貫、河野の二名は 2015 年 9 月 1 日よりウェールズのスウォンジー大学に客員研究員として所属し、2016 年 3 月 31 日までの一部期間に本研究課題に従事した。山田は S. ホールがポピュラー文化を研究対象とする足がかりとしてミドルブラウの大衆物語を再評価したことを明らかにし、Welsh Writing in English に関しては、ウェールズのモダニズム小説がイングランドのそれと比べて現在時制に拘りを示している点を示した。遠藤は F. ジェイムソンのマルクス主義美学を S. Felman の言語行為論を通過した上で R. ウィリアムズにおける action 概念に接続するための理論的な作業を行い、その視点からユートピア概念の再検討も行った。鈴木は世紀末のアナキズムとオスカー・ワイルドの審美批評との関係を、これら両者にとって密接な関係のあったフランス象徴主義文学にも目を配りながらトランスナショナルな文脈において考察し、「観照」と「行動」の対立的共存がワイルド批評に独特の政治性を与えていることを明らかにした。西はデレック・ウォルコット論、森崎和江論、さらには R. ウィリアムズの文化唯物論のポストコロニアル研究への介入の試みとしてポストコロニアル・エコクリティシズムの批判的分析を行った。

最終年度にあたる 2016 年度は、代表者の川端は調査全体を統括しながら、芸術と社会をめぐるウィリアム・モリスの一連の批評がモダニズム作家におよぼした影響について考察した。山田はウェールズの作家アラン・リチャーズを中心に、スウォンジー大学アーカイヴなどで文献ならびに音声録音資料を調査した。遠藤は、心理学的言説、特に精神分析的な見地から再定義された「情動」という文脈で各種文学テクストの解釈を試みた。その試みを支える理論的な枠組みとしてマルクス主義的な美学を採用し、その「残滓」性の精神分析的な再解釈（単なる疎外論ではない）が主目的となった。対象は英文学を超えて三島由紀夫など日本文学にも及んだ。鈴木は、オスカー･ワイルドの批評ないしは美学が、19 世紀末に注目を集めていたアナキズム思想といかなる関係にあったのかを、同時代の詩人マラルメとの比較を通じて考察した。また、ポール・ド・マンによる美学イデオロギー批判の検討を通じて、近代思想の源流に位置づけられるカント及びルソーのテクストがある種の「無情動」を抱え込んでいることを考察した。大貫は、ニューレフト第一世代の執筆活動について、ウェールズ英語文学ならびにソーシャリズム言説との関わりという観点から考察を進め、あわせて、これらの関わりがグローバルな視点からはどう位置付けられるかも考察した。これにより、文化研究のなかで看過されがちだった、文化

理論の形成プロセスと 1980 年代以降の社会主義運動との関連性を記述していく上での足がかりが得られた。河野は、2016 年 4 月から 9 月 2 日にかけて、イギリス・ウェールズのスォンジー大学にリチャード・バートン・センター・フェローとして所属し、ウェールズ文学とレイモンド・ウィリアムズについての研究を進めた。同大学のレイモンド・ウィリアムズ・アーカイヴで資料調査を進めるとともに、英語ウェールズ文学会の年次大会への参加、サイモン・ブルック氏とのセミナーなどを行った。9 月の帰国以降は、ウェールズで得られた資料を検討しつつ、ウェールズ文学についての基礎研究を進めた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 16 件）

① 川端　康雄、レイモンド・ウィリアムズ翻訳始末記、レイモンド・ウィリアムズ研究、査読無、No. 7、2017、 pp. 41-52

② 山田 雄三、オクシモロンというアクション—大貫隆史著『「わたしのソーシャリズム」へ—二〇世紀イギリス文化とレイモンド・ウィリアムズ』、レイモンド・ウィリアムズ研究、査読無、No. 7、2017、pp. 73-77

③ 西　亮太、ユートピアとしての「里山」とそのポリティクス—小野俊太郎『「里山」を宮崎駿で読み直す』を読む、レイモンド・ウィリアムズ研究、査読無、No. 7、 2017、pp. 78-85

④ 鈴木　秀明、観照と行動—ワイルドの美学におけるアナキズム、オスカー・ワイルド研究、査読有、No. 15、2017、pp. 81-96

⑤ 川端　康雄、モリス、ワイルド、ロマンスの精神、オスカー・ワイルド研究、査読有、No. 15、2016、pp. 39-54

⑥ 川端　康雄、『希望の巡礼』のリズム—ウィリアム・モリスの 1880 年代、ヴィクトリア朝文化研究、査読有、No. 14、pp. 3-32

⑦ 川端　康雄、「開かれた問い」を投げる—*Loyalties* を読む、レイモンド・ウィリアムズ研究、査読無、No. 6、2016、pp. 51-63

⑧ Fuhito ENDO, Affect, Realism, and Utopia: Fredric Jameson's Dialogues with De Man, Karatani, and Williams, Bulletin of the Faculty of Humanities (Seikei University), 査読無、No. 51, 2016, pp. 115-126

⑨ 山田　雄三、ミドルブラウとニューレフトとの距離を測る—1950 年代イギリスの大衆読物と政、待兼山論叢、査読無、No. 49、2015、pp. 1-13

⑩ 鈴木　英明、冷戦期アメリカの批評における「不可知なもの」—「ダヴォス討論」とルネ・ウェレック、昭和薬科大学紀要、査読無、No. 49、2015、pp. 33-42

⑪ 河野　真太郎、序にかえて—ウルフと（成人）教育、または 20 世紀の「長い革命」、ヴァージニア・ウルフ研究、査読有、No. 31、2014、pp. 38-51

⑫ 川端　康雄、「大衆などというものは存在しない」—レイモンド・ウィリアムズと産業小説、ギャスケル論集、査読有、No. 24、2014、1-14　http://www.gaskell.jp/ronshu/24/kawabata.pdf

⑬ 遠藤　不比人、リアリズム／ユートピアの弁証法をめぐる情動論的断章—三浦玲一の追悼のために、レイモンド・ウィリアムズ研究、査読無、No. 5、2015、8-25

⑭ 西　亮太、われわれのリアリズム、レイモンド・ウィリアムズ研究、査読無、No. 5、2015、pp. 26-41

⑮ 川端　康雄、Orwell, *Inside the Whale* 覚書、英米文学研究（日本女子大学）、査読無、No. 49, 2014, pp. 159-172

⑯ 河野　真太郎、ポストフォーディスト・ビルドゥングスロマン—「学習社会」の文学史に向けて、レイモンド・ウィリアムズ研究、査読無、No. 4、2014、 pp. 19-56

〔学会発表〕（計 31 件）

① ENDO, Fuhito, Yukio Mishima as a Cold War Novelist: Problematics around the Castration, 2017 MLA Annual Conference（国際学会）, 2017 年 1 月 6 日, Pennsylvania Convention Center, Philadelphia, USA

② ENDO, Fuhito, Landscape and Affect, or the "Primal Scene" of Romanticism: Roger Fry and Virginia Woolf Reconsidered, Romantic Legacies: the 13th Wenshan International Conference（国際学会）, 2016 年 11 月 18 日, National Chengchi University, Taipei, Taiwan

③ ENDO, Fuhito, Affective Materiality/Modernity: Roger Fry and Virginia Woolf Reexamined, Virginia Woolf and Her Legacy in the Age of Globalization（国際学会）, 2016 年 8 月 25 日, Kookmin University, Seoul, South Korea

④ 遠藤不比人、冷戦の日本浪漫派的享楽？—三島由紀夫の「戦後」を再考する、公開研究会「三島由紀夫と 60 年代」、2016 年 6 月 24 日、日本大学文理学部（東京都世田谷区）

⑤ 遠藤不比人、風景の実存／情動化—ヴァージニア・ウルフとロジャー・フライの美学理論、日本英文学会関東支部第 12 回大会（2016 年度夏期大会） メイン・シンポジウム「近代と情動—文学、美学、哲学、心理学の相互交渉をめぐって」、2016 年 6 月 18 日、青山学院大学（東京都渋谷区）

⑥ 川端康雄、ポール・モレルのレッサー・アーツ—ウィリアム・モリスからＤ・Ｈ・ロレンスへ、日本ロレンス協会第 35 回大会　シンポジウム「マモン神に抗って—モリス、ロレンス、オーウェル」、2016 年 6 月 1 日、松山大学樋笠キャンパス（愛媛県松山市）

⑦ 遠藤不比人、Kazuo Ishiguro あるいは「記憶のテクスチャー」、日本英文学会 第 88

回全国大会 シンポジアム「21 世紀のイギリス小説が問う記憶と歴史、2016 年 5 月 28 日、青山学院大学（東京都渋谷区）

⑧ NISHI, Ryota, Raymond Williams' Materialism as/at the Critical Moment, Association for Anglophone Postcolonial Studies（国際学会）, 2016年5月7日, University of Augsburg, Augsburg, Germany

⑨ YAMADA, Yuzo, Viewing Welsh Writing in English from Japan, The Association for Welsh Writing in English Annual Conference 2016（国際学会）, 2016 年 4 月 2 日, Gregynog Hall, Tregynon, Nr Newtown, Powys, UK

⑩ ONUKI, Takashi, Looking into a Metropolitan Placeability: From People of the Black Mountains to (Tokyo) Earth Diver, Viewing Welsh Writing in English from Japan, The Twenty-Eighth Annual Conference of the Association for Welsh Writing in English（国際学会）, 2016 年 4 月 2 日, Gregynog Hall, Tregynon, Nr Newtown, Powys, UK

⑪ KONO, Shintaro, Spies and Friends: *Loyalties* and Cold War Liberalism, Viewing Welsh Writing in English from Japan, The Twenty-Eighth Annual Conference of the Association for Welsh Writing in English（国際学会）, 2016 年 4 月 2 日, Gregynog Hall, Tregynon, Nr Newtown, Powys, UK

⑫ ENDO, Fuhito, Marxist Aesthetics Reconsidered: Jameson, Felman, and Williams, Beyond the Border Country/ Tu Hwnt I'r Gororau/ 辺境をこえて: New Directions in Raymond Williams Studies（国際学会）, 2016 年 3 月 11 日, Pandy Village Hall, Pandy, Monmouthshire, UK

⑬ ONUKI, Takashi, "[T]he placename which you now say as Ewyas": Trying to Translate People of the Black Mountains, Beyond the Border Country/ Tu Hwnt I'r Gororau/ 辺境をこえて: New Directions in Raymond Williams Studies（国際学会）, 2016 年 3 月 11 日, Pandy Village Hall, Pandy, Monmouthshire, UK

⑭ NISHI, Ryota, "You're An Ecologist, Aren't You?": A Brief Note on Ecocriticism and Raymond Williams' Cultural Materialism, Beyond the Border Country/ Tu Hwnt I'r Gororau/ 辺境をこえて: New Directions in Raymond Williams Studies（国際学会）, 2016 年 3 月 11 日, Pandy Village Hall, Pandy, Monmouthshire, UK

⑮ 鈴木　英明、ふたつの「トウキョウ」―ポスト占領期のアメリカ映画における "trans-pacific racisms"、成蹊大学アジア太平洋研究センター、ワークショップ「東アジア映画における「アメリカの影」―不／可視の文化ヘゲモニーを探る、2016 年 2 月 27 日、成蹊大学（東京都武蔵野市）

⑯ ENDO, Fuhito, In the Dead Core of Positivist Historicism: Negativity in Fredric Jameson and Shoshana Felman, The 7th Annual Liberlit Conference, 2016 年 2 月 22 日、東京女子大学（東京都杉並区）

⑰ 川端　康雄、モリス、ワイルド、ロマンスの精神、日本ワイルド協会第 40 回大会、2015 年 12 月 5 日、慶應義塾大学日吉キャンパス（神奈川県横浜市）

⑱ 鈴木　英明、観照と行動―ワイルドの美学におけるアナーキズム、日本ワイルド協会第 40 回大会、2015 年 12 月 5 日、慶應義塾大学日吉キャンパス（神奈川県横浜市）

⑲ 川端　康雄、「希望の巡礼」―ウィリアム・モリスの 1880 年代。1 日本ヴィクトリア朝文化研究学会第 15 回大会、2015 年 11 月 22 日、同志社大学今出川キャンパス（京都府京都市）

⑳ KONO, Shintaro, Beyond "Developmental Narratives": Virginia Woolf, Emyr Humphreys and Haruki Murakami, The Raymond Williams Discussion Group, 2015 年 11 月 9 日、Swansea University, Swansea, UK

㉑ 西　亮太、「異族」との連帯のために―森崎和江の労働運動論と「エロス」のゆくえ」、表象文化論学会、2015 年 7 月 5 日、早稲田大学（東京都新宿区）

㉒ KAWABATA, Yasuo, "Tsuzoku Bunka": Hayao Miyazaki's Egalitarian Cultural Praxis in "The Gift of Illustrations," Spirited Discussions: Exploring 30 Years of Studio Ghibli Conference（国際学会）, 2015 年 4 月 18 日, Cardiff University, Cardiff, UK

㉓ KAWABATA, Yasuo, Orwell, Raymond Williams and "Double Vision," The Twenty-Seventh Annual Conference of the Association for Welsh Writing in English（国際学会）, 2015 年 3 月 28 日, Gregynog Hall, Tregynon, Newtown, Wales, UK

㉔ 山田　雄三、モダニズム・フリンジの人称、時制、バイリンガリズム、日本ヴァージニア・ウルフ協会第 34 回大会シンポジウム「『メタモダニズム』とは何か―現代文学とウルフそして／あるいはモダニズムの『継承』という問題」、2014 年 11 月 16 日、相愛大学（大阪府大阪市）

㉕ 山田　雄三、管見―モダニズム文学の人称と時制、阪大英文学会第 47 回大会、2014 年 10 月 18 日、大阪大学豊中キャンパス（大阪府豊中市）

㉖ ENDO, Fuhito, A Reading of Jameson's Reading of Realism/Utopia: Its Dialogues with Karatani, de Man, and Williams, The Im/possibility of Realism and Utopia: Jameson, Williams, and Fiction, 2014 年 9 月 6 日、大阪大学豊中キャンパス（大阪府豊

中市）
㉗　川端　康雄、チェスタトンの愛国心、日本英文学会第 86 回大会シンポジウム「戦争と文学の軌跡―ナポレオン戦争から第一次世界大戦まで」、2014 年 5 月 24 日、北海道大学札幌キャンパス（北海道札幌市）
㉘　山田　雄三、ミドルブラウとニューレフトとの距離を測る、日本英文学会第 86 回大会シンポジウム「ミドルブラウという名の挑発」、2014 年 5 月 24 日、北海道大学札幌キャンパス（北海道札幌市）
㉙　KAWABATA, Yasuo, Ruskin, Morris and Laissez-Faire, Culture as a Whole Complex: (Re)Action to Industrialism and Laissez-Faire Thought (Raymond Williams in Transit IV（国際学会）, 2014 年 3 月 16 日, 日本女子大学目白キャンパス（東京都文京区）
㉚ YAMADA, Yuzo, Commentary for “Sons and Friends: Emyr Humphreys and the Novels of Growth” (Shintaro Kono), Culture as a Whole Complex: (Re)Action to Industrialism and Laissez-Faire Thought (Raymond Williams in Transit IV（国際学会）、2014 年 3 月 16 日、日本女子大学目白キャンパス（東京都文京区）
㉛　大貫　隆史、サイードとウィリアムズの「ことばづかい」―二人の距離を「測定」する、日本英文学会関西支部第 8 回大会シンポジウム「サイード再読―没十年後の遺産」、2013 年 12 月 22 日、龍谷大学大宮キャンパス（京都府京都市）

〔図書〕（計 8 件）
①　遠藤不比人、彩流社、情動とモダニティー―英米文学／精神分析／批評理論　2017 、273 ページ
②　遠藤不比人　他、風間書房、人文学の沃野、2017、288 ページ
③　遠藤不比人　他、風間書房、文化現象としての恋愛とイデオロギー、2017、323 ページ
④　遠藤不比人　他、水声社、混沌と抗戦―三島由紀夫と日本、世界、2016、462 ページ
⑤　川端康雄、岩波書店、ウィリアム・モリスの遺したもの―デザイン・社会主義・手仕事・文学、2016、328 ページ
⑥　山田　雄三、沖田知子・米本弘一編『英語のデザインを読む―阪大英文学会叢書８』（山田雄三、「モダニズム・フリンジの人称, 時制, バイリンガリズム」、pp. 78-89）、2015、253 ページ
⑦　西　亮太、堀之内出版、労働と思想（市野川容孝・渋谷望編著、分担執筆：「思想と『労働者』―ロウロウシャとは何だ」pp. 383-406）、2015、512 ページ
⑧　川端　康雄、竹林舎、ロンドン―アートとテクノロジー（山口惠里子編、分担執筆：「〈大きなこぶ〉のなかで―ウィリアム・モリスとアーツ・アンド・クラフツ運動」、pp. 286-311）、2014、512 ページ

〔その他〕
ホームページ等
http://raymondwilliams.jp/wordpress/

６．研究組織
(1)研究代表者
川端　康雄（KAWABATA, Yasuo）
日本女子大学・文学部・教授
研究者番号：80214683

(2)研究分担者
山田 雄三（YAMADA, Yuzo）
大阪大学・文学研究科・准教授
研究者番号：10273715

遠藤 不比人（ENDO, Fuhito）
成蹊大学・文学部・教授
研究者番号：30248992

河野 真太郎（KONO,　Shintaro）
一橋大学・商学研究科・准教授
研究者番号：30411101

大貫 隆史（ONUKI, Takashi）
関西学院大学・商学部・准教授
研究者番号：40404800

西　亮太（NISHI, Ryota）
中央大学・法学部・助教
研究者番号：60733235

鈴木 英明（SUZUKI, Hideaki）
昭和薬科大学・薬学部・教授
研究者番号：70299965